

# 専齋 SENSAL



## 院長年頭所感

幹部職員 新年のご挨拶

年男の今年の抱負

## 長與 専齋 (1838年～1902年)

大村藩御殿医の家系に生まれる。緒方洪庵の適塾に学び、福澤諭吉の後を襲い塾頭となる。初代衛生局長として我が国の近代医療制度の確立に尽力した。衛生という言葉をはじめ採用したのも専齋である。専齋の生家は「宜雨宜晴亭」と呼ばれ、長崎医療センター敷地内に移築されている。

院長年頭所感



院長  
江崎 宏典

あけましておめでとうございます。皆様におかれてはコロナ禍の影響で例年とは違った静かな年末年始を過ごされたのではないのでしょうか。

昨年、令和2年はコロナへの対応に振り回された一年でした。昨年の当院のおかれた状況を振り返ってみたいと思います。年が明けてすぐに新型コロナウイルス感染症が広がり、4月には緊急事態宣言が7都府県に出され、その後対象地域が全国に拡大されました。長崎では緊急事態宣言に加え、クルーズ船コスタ・アトランチカ号でのクラスター発生もあり、当院も通常診療を抑制気味とし、コロナ診療に対応できる体制に舵を切りました。また当院のDMATは連日クルーズ船対応に出動し、大きな成果をあげてくれました。8月には大村市でもクラスターが発生し、その対応に追われました。

コロナ以外では9月には集中豪雨、10月には台風と自然災害が相次いで発生しました。幸いなことに当院には大きな被害はありませんでしたが、9月の豪雨で大きな被害にあった熊本県へDMATが派遣され、頑張っていたいただきました。あらためて感謝したいと思います。

令和3年もコロナへの対応が最重要課題であることは言を俟ちません。病院としてもこれまで以上に感染対策を徹底していきたいと思っています。また個人個人もこれまで実施されてきたとは思いますが、引き続き感染を避ける行動をとっていただきたいと思っています。ワクチンに関しては既に欧米では接種が開始されていますが、わが国でも3月にはワクチン接種が開始されるという報道がされています。感染予防策の徹底とワクチンで本年中にはコロナ感染が終息することを願っています。

コロナ以外で医療界での本年の懸案事項は地域医療構想と働き方改革があります。地域医療構想についてはコロナの影響で昨年は検討が先送りされていました。しかし2025年に向けてもう時間的に余裕がないので、本年は検討が大きく進むものと思われま。ただ未曾有のコロナ禍を経験した結果、効率性だけでなく、ある程度余裕のある病床の整備の必要性を関係者一同が痛感しました。このことが、今後の地域医療構想の再検証の場で大きく影響してくる可能性が高いと思います。地域医療構想がどのように見直されるかによって、これからの県央医療圏の医療提供体制のあり方、ひいては当院の診療体制をどう変えていくのかといったことに影響してくると考えています。

働き方改革についてはいかに長時間労働を是正するかということにつきます。これまでも種々の取り組みをしてきましたが、本年も時間管理、役割分担の推進などを進めていきたいと思っています。

最後になりますが、昨年は新型コロナ感染の流行により、診療体制のあり方や日々の行動の見直しなど、大変なご苦労をおかけしました。皆さんの理解と協力を得て、模索しながらではありましたが一年を乗り切り、新しい年を迎える事が出来ました。大変ありがたく思っています。完全な終息がまだまだ見通せない中、医療のみならず社会環境は厳しい状況が続きますが、現下の状況に対応できるように皆で知恵や工夫を出し合って乗り越えていきたいと思っています。

この新しい年が、皆様にとってよりよき一年であることを祈念して、私の新年の挨拶とさせていただきます。

### 長崎医療センターの使命

長崎医療センターは以下の活動を誠実にを行い、地域拠点病院として住民と医療機関からの信頼を得る。

1. 安全で質の高い医療を提供する
2. 絶対に断らない救急医療の最後の砦となる気概を持つ
3. 地域の医療機関、行政と密接に連携する
4. すべての医療人と学生に魅力的な教育研修を提供する
5. 臨床研究を推進し、国際医療協力に貢献する
6. 健全な経営基盤を確立する



## 新年のご挨拶(幹部職員)

### 副院長 八橋 弘

新年明けましておめでとうございます。まず年末年始の急患患者さん、重症患者さんに対応いただき、有難うございました。昨年を振り返ると、世界的には新型コロナウイルス感染症（COVID19）脅威の年であり、また九州長崎では水害や台風などの自然災害の年であったと思います。当院では長崎クルーズ船の対応や被災地熊本への出勤などDMATチームが中心となってともに活躍し対処してくれました。

私が副院長に就任してからこの2年間、より安全な医療の提供と職員の負担軽減、そしてスマートな医療の展開を心掛けてきました。しかしながら振り返ってみますと最も時間とエネルギーを注いだのは院内感染とCOVID19という2つの感染症対策です。32年前、私は製薬会社の研究所で当時開発されたばかりのPCRの手法を習得して臨床研究部内にその測定系を立ち上げました。今までに10名以上の海外留学生にPCRを手法とした英文論文の指導もおこなってきました。昨年、COVID19の診断に関連してPCRがこのように新聞記事の紙面を賑わすようになるとは夢にも思ってもいませんでした。そのような経緯もあり、当院では複数のCOVID19の診断法を検査科内に導入して、現場のニーズに応じて迅速に診断対応できるようにしました。

COVID19の感染対策については、多くの職員がどうあるべきか考え、協議とトレーニングを重ねながらチームとして行動してくれました。有難うございます。「COVID19の問題がいつまでも続くことはない。もう数か月の辛抱だ、みんなで頑張ろう。」これは新年を迎えての私のつぶやきです。

「One for all, All for one」という言葉が、フランスの小説「三銃士」の中で主人公のダルタニャンと三銃士との誓いの言葉として書かれています。通常「一人はみんなの為に、みんなは一人の為に」と訳されますが、「一人はみんなの為に、みんなはひとつの目的のために」と訳すとも言われています。私は、この2つの訳のどちらかではなく、言葉はひとつでも2つの訳をともに心の中に携えて、この難局に立ち向かってゆきたいと思っています。今年も宜しくお願いいたします。



「三銃士」より 1894年挿画

### 臨床研究センター長 黒木 保

新年あけましておめでとうございます。

皆様にとってより良き一年になりますよう祈念いたします。

昨年は、一昨年から続く感染症による逆風にさらされ続けた一年でした。この逆風の中われわれ長崎医療センター職員は一丸となり大いに健闘したと自負しております。逆境の中においては病院の総合力が物を言います。研究の分野は医療現場においては決して前面に出ることはありませんが、総合力を高めるには必要不可欠の要素と

信じております。丑年は「芽がでる予兆」を表す年だそうです。今年からの長崎医療センターの飛躍を楽しみにしております。

臨床研究センターのコンセプトである「エンジョイリサーチ」を今年も推し進めたいと思います。研究は楽しいものです。臨床とも両立できます。一体感をもって病院全体でリサーチを楽しむ風土を作り上げていきたいと思います。

今年もよろしくお願いいたします。

### 統括診療部長 吉田 真一郎

新年あけましておめでとうございます。

昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大が、大変大きな影響をもたらした一年でした。診療体制の構築、医療チームの派遣等、対応にあたって頂きました全ての部署の皆さんのご尽力に感謝いたします。病院における教育や研究の活動におきましても、ITを活用したオンライン化の推進など、大きな変化が進んでいます。地域の医療機関との連携、あるいは病院からの情報発信のあり方につきましても、変化を取り入れつつ、さらに発展出来るよう新しい形での取り組みも検討していきたいと思っております。

引き続き地域の皆さまのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

昨年11月に日本輸血・細胞治療学会九州支部会の例会長を務める機会を頂きました。オンライン開催としたため、九州の外からも多数の参加があり、国内の多くの輸血関係者に当院の輸血に対する取り組みをアピールさせていただきました。演題発表、事務補助など、ご協力いただいた院内の皆さまにも、この場をかりて感謝を申し上げます。

今年が皆さまにとりまして、素晴らしい一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。



## 新年のご挨拶(幹部職員)

## 事務部長 有岡 雅之

新年明けましておめでとうございます。

事務部の運営につきましては、日ごろからご支援とご協力を賜り、感謝申し上げます。

さて、昨年の元旦の時点では、まだ国内における新型コロナウイルス感染者は確認されていませんでしたので、いつも通りの穏やかな新年を迎えていました。しかし、1月16日に厚生労働省により国内で初めての感染者が確認されたと発表され、そこから1年で日本の社会は激変してしまいました。市中感染が拡大し、人の移動と接触が大きく制限され、医療機関を取り巻く環境も厳しいものとなり、病院経営も全国的に悪化していくなか、当院も例外ではなく、入院や手術の延

期により4月から6月にかけて収支は大きく落ち込みました。そういった状況下においても事務部としてはマスク等の防護具の確保や入館者のチェック体制、さらにコロナ関連の補助金の申請等など災害時におけるロジスティク的な役割を果たす事が出来たのではないかと思います。新年においてもコロナ関連の業務について万全の態勢で臨むことはもちろんのこと、ポストコロナの病院経営についても事務部が主体となって企画立案を行い、積極的に参画するとともに、「働き方改革」への対応も待たなしの状況ですので忙しい1年となりそうです。

今年もよろしくお願いたします。

## 看護部長 西山 ゆかり

あけましておめでとうございます。

2021年「辛丑」の年です。干支はそれぞれ植物の一生を表しているそうですが、辛は、「草木が枯れ、新しくなろうとしている状態」、丑は「種から芽が出ようとする状態」です。終わると同時に始まる。昨年はコロナ禍で閉塞感のある年でしたが、職員一丸となり、歩んできました。万物が新しく生まれ、芽吹いて成長していくように、それぞれの花を咲かせることができるよう成長の年にしたいと願います。

人は宝であり、今年度、関係の質向上プロジェクトをスタートしました。私たちの「関係の質」を見直し、お互いがお

互いを認め、高めていくことができる組織作りを目的とし、看護実習生も含めた挨拶と言葉かけ運動や、現場の声を反映した採用活動、人材育成に関する看護師長・副看護師長会での事例検討や学習会など、職員全体が学び合い、個々を尊重しながら役割を果たしていくことができるような取り組みを行っています。

患者さんやご家族、地域の皆様に信頼され、安心して日々の生活を、その人がその人らしくおくることができるよう、一層努力してまいります。本年もどうぞよろしくお願いたします。

## 年男の今年の抱負

## 古希の目標

今年還暦を迎えます。これまで10歳ごとに次の10年の目標を立てて生きてきました。50歳の時の目標は

1. 英文論文を100本書く
2. 最後はポルシェに乗る
3. 赤パンをはく(ラグビー界では60歳のプレーヤーは赤いパンツで試合ができます。赤パンに対してはタックル禁止)

で幸い全部クリアできています。

古希である次の10年に向けて今年は目標を立てました。

1. 教え子から大学教授を輩出する
2. 70歳で免許を返納する
3. 黄パンをはく(70歳のプレーヤーは黄色いパンツをはけます。黄パンに対しては捕まえること禁止)

多分10年後は現役を完全に引退しているはずですが「あんなヤカマシイ先生がいたね」と記憶に残る最後を全うしたいと考えています。

形成外科部長 藤岡 正樹

新年明けましておめでとうございます。

臨床工学技士となり1年が経とうとしています。コミュニケーションや業務の流れ、技術等を覚える事が多くあり目の前の事をこなすことで精一杯であったと感じます。できることが増えていく一方、ミスをしたり課題が増えていき悩む時期もありましたが、丁寧に教えてくださる先輩方に支えられ少しずつ自身の成長を実感しています。

年男といっても特別な感じはしませんが、今年はお牛のように一歩一歩確実な歩みで大きな成果に向け仕事やプライベートをギュウ〜とつまった年になるよう努力を重ねていきたいと思っています。本年もよろしくお願いたします。

臨床工学技士 下野 恭平

